

山形長谷川家の商業活動

―「奥羽の商都」の巨大紅花商人―

岩 田 浩太郎

はじめに

―「奥羽の商都」山形という視点―

羽州村山地方の近世史研究は、農村や地主豪農の研究が進み、戦後の歴史学界で注目を浴びましたが、都市や都市の商人の研究はまだまだわずかにしか行われていないのが現状ではないでしょうか。山形城下町商人の研究も少ないといえます。横山昭男氏が佐藤利兵衛家の上方との紅花取引を考察された貴重な研究成果などが発表されており、それらの成果をふまえて、今後、個別商人に関する本格的な実証研究を蓄積する課題があると考えています^①。

わたしは、江戸時代の後期から明治の前期にかけて、都市山形は、東北地方、当時の言葉でいえば奥羽（陸奥国・出羽国）地方の南半分のとくに内陸部を中心とした広い地域と全国を結ぶ商業都市として発展していたのではないかと考えています。報告の副題で「奥羽の商都」という言葉を使っていますが、山形城下町を「奥羽の商都」の有力な一つとしてとらえる観点を設定し、その実態を検討してい

く必要があると、近年こうした公開の場で提案しています^②。

山形城下町が広い商圏をもっていたことや山形商人の活躍ぶりについては、山形の歴史にお詳しいお年寄りの方々によって語り継がれています。また、渡辺徳太郎氏（明治期）や後藤嘉一氏（戦後）の文献では、回顧談や聞き取り取材により、失われつつある記憶を書きとめてくれています^③。ここでは、江戸時代に書かれた文書のなかで山形商業の性格について概観したものを例示してみましよう（傍線は報告者による。原文の一部を平仮名などに改訂）。

資料1

山形町之儀は往古最上家之御在城にて当時秋元但馬守様御城下二有之、町数三拾三ヶ町其外町統之在村も有之、家数凡壹万軒程之大場二付、右町之もの共は何れも農業耕作等不仕、商ひ一図之者共のみにて、村山郡村々数百ヶ村に有之候商人之人数より山形町壹ヶ所之商人は十倍も多く、勿論同所は至て都合宜敷場所故、奥州仙台辺三春白石伊達郡、羽州置賜郡米沢、或は越後最寄之商人共平常共入組み、諸品売買仕候土地柄にて、村山郡在々村々之商

人共も酒田湊へ罷越仕入致し候ものは稀にて、大概是山形町へ罷出仕入方仕候儀二有之、酒田湊より村山郡一郡へ登り候荷物は、凡七、八分通も山形行二可有之

(天保十三年(一八四二) 漆山附郡中惣代訴願書)⁴

資料2

山形町八大場にて商人数多有之、右紅花荷物例年村山一郡より凡千駄余も駄送之内八分通ハ山形より出荷物にて、古来より天童外五ヶ宿を継立大石田川岸迄駄送仕来、同所より船積同国酒田湊へ運送二相成候(中略)、山形町之義ハ奥羽第一之場所にて諸国之商人入込諸色売買有之、紅花を始め上下之諸荷物数多有之、右駄送り之潤益ハ宿方第一之助成二いたし、御伝馬相勤罷在候儀二御座候

(嘉永三年(一八五〇) 羽州街道宿方六ヶ村訴願返答書)⁵

資料3

一、山形城下至て繁昌御座候間、凡近国之諸品悉く山形へ持出し、夫より他国へ出し、又上方或は江戸其外之諸品にても一旦山形へ着荷之上近国へ売捌相成候儀御座候間、是等之ために目早と申す者荷主之手先に相成捌方出来いたし荷主共相互に荷数捌高之多少知れざる様に相成居候趣に承及申候、目早何れも妻子持にて相応之利潤を得候事に御座候

(通) (通)

一、右元方荷主は御用達相勤候長谷川吉郎次、村井清七、佐藤利兵衛、福島治助、此四人専ら之家業に御座候、何れも相応之富家に御座候、御領主之御威光にても容易に変革相成兼候事と奉存候

(嘉永年間 山形御産物廻送之儀二付書付 山形藩水野家文書)⁶

資料1をご覧ください。これは、天保十三年(一八四二)年の漆山附郡中惣代の訴願書です。傍線部に注目していくと、山形城下町は「大場」(大きな場所)であるとか、「同所は至て都合宜敷場所故奥州仙台辺・三春・白石・伊達郡、羽州置賜郡米沢、或は越後最寄之商人共平常共入組み、諸品売買仕候土地柄」と記し、山形城下町の商圈が村山郡域にとどまらずひろく奥羽南域に及ぶものであり、遠方では三春や越後の商人まで売り買いに山形へ来ると指摘しています。また、資料2は嘉永三年(一八五〇)の羽州街道宿方の訴願書です。「山形町之義ハ奥羽第一之場所にて諸国之商人入込諸色売買これあり」として、山形城下町を「奥羽第一之場所」と位置づけています。資料3でも「山形城下至て繁昌に御座候間、凡そ近国之諸品悉く山形へ持出し夫より他国へ出し、又上方或は江戸其外之諸品にても一旦山形へ着荷之上、近国へ売捌き相成候儀に御座候」と書いています。後半では、山形藩の御用達である長谷川家などが「富家」となり、「御領主之御威光」にもなかなか従わない存在となっていると書いています。これらから、山形城下町が大場として発展し、奥羽近国つまり南奥羽を中心とした地域と上方など全国を結ぶ商業中継地となっていたことが窺えます。

先行研究では、例えば『山形市史』が資料1を根拠として「江戸時代には酒田と山形の方が表側で、仙台が裏側であったので、山形商人の活躍は素晴らしいものがあつた」(長井政太郎氏執筆)と述べています⁷。ただ、これらの資料は商業流通の利害関係にある者が訴訟で書いたものであるため誇張されている危険があり、あるいは領主側の記録であるので、そのままでは直ちに鵜呑みにすることはで

きません。わたしは、現在の研究課題はこうした資料や古老による伝承を手がかりとしながらも、その裏付けをきちんととっていくことだと考えています。とくに山形城下町商人による奥羽商業の実態についてはほとんどあきらかになっていないのが現状です。旧家の古文書を掘り起こし、経営帳簿その他の史料から、個々の山形商人が本当に奥羽を股にかけた商業をおこなっていたのかどうか、その実態を検証する作業を積み重ねることが必要だと考えています。

今日は、その作業の一環として、^{マサル}長谷川吉郎治家について、みなさんにご報告します。^{マサル}長谷川家は、十日町三丁目の長谷川博明氏（最近まで山形市立中学校の校長先生を歴任された方です）のお宅です（現在、長谷川商店）。分家に、現在きらやか銀行頭取である長谷川憲治氏の^{マルヤ}長谷川家があり、また隠居別家に、現在山形銀行頭取である長谷川吉茂氏の^{マルヤ}長谷川家があります。山形城下町の繁栄を築いた商人のなかでも^{マサル}長谷川家は山形藩御用達筆頭として、幕末維新期におそらく最大の山形商人であつたのではないかと考えています。長谷川家の繁栄を物語る語り口に、「瀬戸内や日本海の津々浦々、何処の港にも丸長の荷物のない処はなかった」とか、酒田の「本間家一千万両、長谷川家百万両」とか、あるいは「千歳山が崩れても長谷川家は倒れない」とか、の言葉があります。面白い語り口ですが、今日は実際の古文書から研究し、これまであきらかでなかった長谷川家の成長過程と商業活動の実態について、みなさんにご報告したいと思います。

一 長谷川家の成長過程

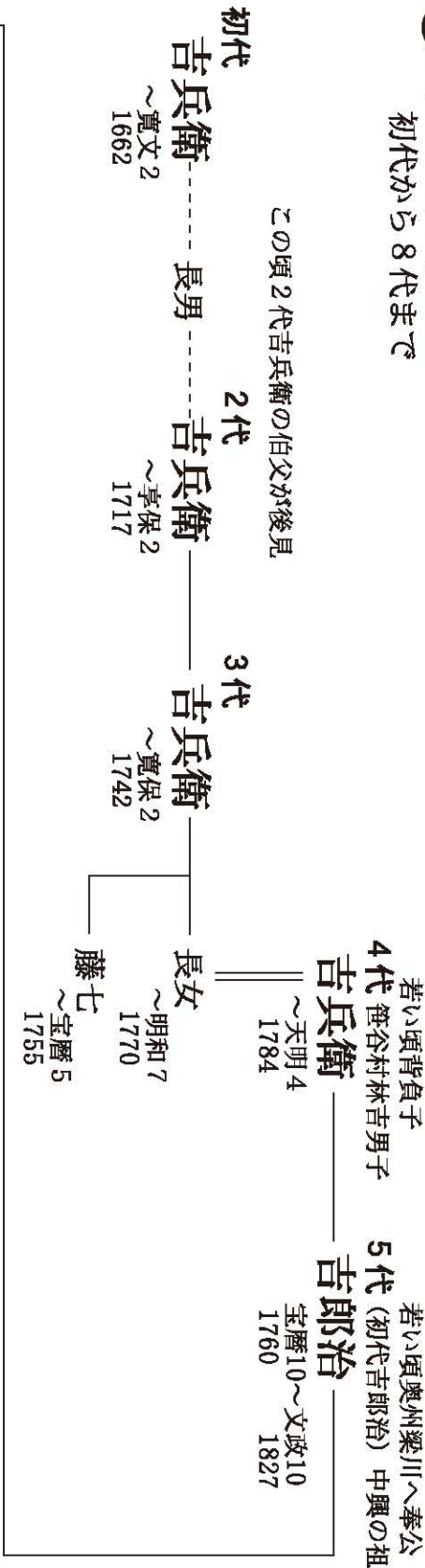
それでは、まず、^{マサル}長谷川家の商人としての成長過程について報告します。

長谷川博明氏や長谷川吉茂氏のご教示によれば、^{マサル}長谷川家の初代は吉兵衛といえます（長谷川家略系図を参照^③）。長谷川家歴代の墓碑や過去帳などによれば、初代は江戸時代前半の寛文二年（一六六二）に亡くなっています。菩提寺は浄土宗実相寺^{じつそうじ}。二代・三代も吉兵衛を名乗り、四代吉兵衛は天明四年（一七八四）に亡くなっています。この方は笹谷村の生まれで、長谷川家へ婿養子に入ったと伝えられています。同家の伝承によれば、四代目は若い頃笹谷峠で背負子^{せういこ}（荷物を背負い運搬をする仕事）をしており、勤勉で、商人として発展する基礎となる資金を貯えたといわれます。そして、五代目となる息子吉郎治に商業を学ばせるため、関係のあつた奥州伊達郡梁川^{やながわ}（現在の福島県伊達市梁川町）の商家に奉公に出しています。息子はそこで商業取引のノウハウを学び山形に戻り長谷川家を発展させていきますが、この話から四代目が奥羽山脈を越えて活動していたことが窺われます。この奥州伊達郡方面との関係がこのあとの長谷川家発展の一つの基礎となるので重要です。

五代目は吉郎治と名乗ったことから初代吉郎治とも呼ばれ、長谷川家中興の祖とされています。宝暦一〇年（一七六〇）頃に生まれ、天明四年（一七八四）に家督を継ぎます。吉郎治が寛政五年（一七九三）から書き始めた「永代帳」という帳面が、^④長谷川家に残されています。その帳面に記載された店卸^{たなおろし}（棚卸し）調べの内容を表1に示しました。店卸調べとは、いわば店方の動産資産調べのことで、

⑧長谷川家略系図 (長谷川吉茂氏調査をもとに簡略に図示)

初代から8代まで



山形藩士格御用達筆頭・仙台藩伊達家御用達

6代 (2代吉郎治) 幼名吉兵衛

吉郎治

天明8～慶応元
1788 1865

⑩長谷川家初代

和五郎

寛政5～弘化4
1793 1847

⑨長谷川家初代 (嘉永3分家)

吉内

享和3～慶応元
1803 1865

おまさ

天保3～大正11
1832 1922

⑨長谷川家2代

吉内

天保8～明治3
1837 1870

表 1 寛政～享和期における長谷川吉郎治家の店御調高および取扱い商品・貸付先の動向

年 代	店御改月	惣 べ	主な在庫・売掛・買掛商品 (売先・預け先ないし買入先の地名・金額)	主な貸付先・荷預け先 (人名ないし地名・金額)
寛政 5	丑年正月 (1793)	両分米 65.32	畳糸 (9 両)、干瓢 (4 両)、紅花 (2 両)、ちり置紙、花袋紙、花染、干わらび、巻木綿、青苧	(かし10両)
寛政 6	寅年 2 月 (1794)	80.10	紅花 (34 両)、花染 (10 両)、畳糸、懷中紅、花縫、かのご縫	門治郎 (6 両)、五十嵐 (4 両)、 <u>福嶋鶴文</u> 、 <u>福嶋宿</u> 、二本松近江屋、 <u>前田長作</u>
寛政 7	卯年不政 (1795)	125位	(記載無し)	(記載無し)
寛政 8	辰年不政 (1796)	190位	(記載無し)	(記載無し)
寛政 9	巳年正月 (1797)	127.02	紅花 (仲間。 <u>上方</u> 79両)、荏油仕入 (56両)、花染 (37両)、大豆 (9 両)、青苧、白木綿、絹木綿、ちり置紙	<u>前田</u> (10両)、 <u>かち町</u> (10両)、仁吉 (10両)、 <u>白右</u> (7 両)、 <u>伊達</u> (6 両)
寛政 10	午年正月 (1798)	174.22	荏油仕入 (83両)、紅花 (<u>上方</u> 42両)、花染 (26両)、練綿 (仲間。13両)、ちり置紙、大豆、畳糸、青苧、糸	当地 (47両)、 <u>福嶋</u> (22両。預け荷含む)、 <u>健屋儀兵衛</u> (20両。敷金)
寛政 11	未年正月 (1799)	200.20	紅花 (京都69両)、荏油仕入 (40両)、晒織 (仲間。19両)、水油 (11両)、花染 (17両)、ちり置紙 (15両)、米、練綿	当地 (38両)、 <u>勘重郎</u> (20両)、 <u>伊達</u> (17両)、 <u>鞆町庄右衛門士藏</u> 敷金
寛政 12	申年正月 (1800)	171.30	紅花 (京都74両)、荏油仕入 (50両)、花染 (30両)、水油、仕入味噌たまり (42 両)、 <u>奥山</u> 大豆、秋味、 <u>古内</u> 米、青苧	<u>伊達</u> (15両。花染・麻布など預け荷含む)、五十嵐又兵衛 (10両)、 <u>前田</u> 、 <u>歩町</u> 新六
享和元	酉年正月 (1801)	219.10	紅花 (67両、うち京都57両)、見世方古手類 (59両)、造り味噌たまり (54両)、荏油 (50両)、 <u>三州</u> 白木綿	当所 (57両)、田地敷金 (13両)、 <u>前田</u> (7 両)
享和 2	戌年正月 (1802)	219.20	見世方 (248両)、造り味噌たまり (21両)、仕入味噌 (45両)、荏油 (33両)、花染 (5 両)。 <u>仙台</u> ・ <u>伊達</u> に預置、荏粕	<u>前田</u> (6 両)、 <u>染屋</u> 善七 (2 両)

典拠) 寛政 5 年「永代帳 長谷川吉郎治」(長谷川吉茂氏所蔵)。
補注) 惣べ欄には、各年の有荷物・貸方分・有金の合計から借方分 (入金) を差し引いた店方資産の総額を示した。本帳面では寛政 9 年以降、各年店御の末尾の惣べではしばしば入金 (借金) を含んだ額を記載しているが、本表では入金 (借金) を差し引いた額を表示した。なお、寛政 9～11 年は100両、寛政12～享和 2 年は150両の入金 (借金) が記載されている。仲間とは、商人仲間を組んで取引していることを示す。惣べ欄以外の金額については両未満を四捨五入した。

在庫商品・貸付債権・現金などからなる資産合計から借入金などの負債合計を差し引いて「惣〆」を計算しています。「惣〆」の欄をみますと、寛政五年（一七九三）から享和二年（一八〇二）の九年間に六五両から二一九両へと約三・四倍に増加しています。確かに五代目の時期に長谷川家が商人として急成長したことが裏付けられるといえます。どのような商品を扱っていたかを在庫品などから検討すると、最初の寛政五年には、畳糸・ちり置紙（塵紙）などの雑貨、干瓢・干わらびといった食材、花染（紅花で染めた反物）。出羽三山の参詣者なども白装束の下の腹帯に好んで使用。山形城下町の土産物の一つ・巻木綿などの衣料関係、それに紅花・青苧を取り扱っています。次第に、紅花の比重が高まり、紅花に関する寛政九年（一八〇二）の記事からは長谷川家が紅花を上方（京都）へ登せたことが確認できるので、遅くとも寛政期には長谷川家は上方と直接に取引を開始したことがわかります。寛政九年から享和年間の商品をみますと、次第に扱う商品の種類が豊富になり、例えば油や味噌たまりを扱うようになります。また、縹綿・三河の白木綿・古手（古着）などの上方や全国からの帰り荷と予想される商品や古内茶（常陸国水戸藩領産）など遠隔地からの商品の取り扱いが確認できるようになります。花染は、紅花とともにほぼ一貫して扱っていますが、享和二年の記事からは花染五〇反を仙台や伊達郡へ預けているとしており、奥州各地に花染を売り込んでいることがわかります。また、享和元年の記事からは「見世方」で扱う古手類などの店卸額が一括して計上されるようになり、翌二年には増額しています。この頃に、同家の経営のなかで見世方という単位ないし部門が成立し帰り荷な

どを販売する態勢が整えられていったことが窺われます。成長期の長谷川家が主に扱った雑貨や油・味噌たまり・綿・古手・茶などはいわば大衆の日用品といえます。商売の仕方としては、長谷川家が単独で取引することが基本ですが、山形城下町商人相互で仲間を組んで共同出資で取引をしていた場合も見られます。例えば表1の寛政九年の紅花、一〇年の縹綿、一一年の晒蠟について括弧内に仲間と書きましたが、これらは仲間が出荷したり仕入れているケースです。

さらに、貸付先をみますと、山形城下の町人や近隣の前田村などに貸しているほか、白石・伊達郡・福島・二本松の商人に対して、売掛金の残額などを貸していることがわかります。伊達郡はさきほど述べた五代目の若いときの奉公先であり、奉公先で築いた関係が山形に帰ってからの取引に生きてきていると考えられます。

以上から、長谷川家は一八世紀半ばより、背負子であった四代吉兵衛の努力により奥州方面との取引も始め、商人としての基礎を築き、それを受け継いだ五代目の吉郎治の時期に紅花商いを本格化し、上方との直接取引をはじめ全国物資を扱う商人へと成長したと把握できます。奥羽山脈を越えた売り込み先も仙台・白石・伊達郡・福島・二本松など奥州南域にひろがり、広域的な商業網を築きはじめています。長谷川家には、五代目吉郎治の代になっても祖先から受けた高恩に感謝の意を込めて背負子の背負い道具を床の間に飾っていたという話しが伝えられています。この伝承は、四代から五代にかけての長谷川家の成長過程とまさに符合するものといえます。つぎに、表2は同じく「永代帳」に書かれている記事について年

表風に整理したものです。ここでは長谷川家の成長過程に関わる記事について、三つのポイントに絞って報告します。

第一に、アンダーラインを引いた箇所に注目してください。寛政五年・九年・十一年・十二年などの年に次々と、無尽講むじんこう（頼母子講たのもしこう）加入者が預金して順番に借り元利を返済して回していく庶民金融）に加入していることです。同じ年に二つの無尽講に参加した年もあります。寺や商人が発起した無尽講であり、それぞれの括弧内に加入者の名前を少し紹介しましたが、山形城下町の中小商人が多く、また青山治右衛門（大坂屋）や岩倉太惣次、福島屋治助などの有力商人が加入する無尽講にも参加しています。先の店御調べでは、長谷川家は寛政九年以降、毎年一〇〇〜一五〇両の借入金が認められ（表1の補注を参照）、それを差し引きしても上回る売り上げをあげるといふ、いわば借入れを前提にした積極的な拡大経営の方向が認められます。この事実とあわせるならば、これから次々に加入した無尽講は経営拡大を支えた借入金の供給源として位置付いたと思われる。寛政期の長谷川家の成長を支えた一つの基盤に、山形城下町の商人相互の無尽金融があったことが注目されます。

第二は、長谷川家の家屋敷や家財道具の整備についてです。長谷川吉茂氏のご教示によれば、五代目吉郎治は山形城下材木町の黒木屋の住居に住んでいたとのこと。そして表2にもあるように、寛政一〇年暮れに材木町の近くの十日町へ引っ越しています。具体的には、貸付金の担保として質にとっていた十日町鍵屋の屋敷の建具や家具を改築したり整備して引越し、はじめて羽州街道沿いの、いわば表通りに位置する十日町の住人となりました。この前後の記

事をみますと、寛政九年・一〇年に油屋道具を購入し、引っ越した直後の寛政一一年初めには味噌たまりの道具を購入しています。このことは先ほどの店御の表（表1）で指摘した、この時期に油や味噌たまりをはじめ取り扱う商品の種類を増加させていることの裏付けとなります。十日町への引越はそうした商業経営の拡大に相応しい店舗と住居の整備の意味があったと考えられます。さらに、文化五年（一八〇八）には、家内諸道具を上方から大量に購入しています。屏風をはじめ大小の皿、輪嶋塗りの椀やお膳が組で揃えられ、お客を呼んで接待する態勢が整えられています。また、文化三年（一八〇六）には、十日町の東側の鞆町の庄右衛門の土蔵を借りて借家人を住まわせています。文政六年（一八二〇）には、山形城下町の有力商人であった元吉田利八家より二軒分の屋敷地を購入しています。このように、一八世紀末から一九世紀前半にかけて長谷川家は山形城下町の中心部である十日町に進出し、家財を整備し、さらに屋敷地を集積し、居宅や店舗とは別の屋敷を持ち（これを抱屋敷かかえと言います）、借家経営をするなど、いわゆる「大店」化していったことが指摘できます。五代目の吉郎治は文政一〇年（一八二七）に亡くなり、六代目は息子が継ぎ、やはり吉郎治を名乗りますが、ほぼ五代目の晩年までに長谷川家は中堅商人からさらに大店へと成長したとみることができま。す。ちなみに、弘化三年（一八四六）には材木町に持っていた屋敷を売り払っています。

第三に、成長した長谷川家が文政期以降に藩や社会事業に関わっていく動向が注目されます。まず、表2の文政七年（一八二四）の記事をみてください。この年には須川や馬見ヶ崎川の洪水があり、

表2 長谷川吉郎治家「永代帳」記事一覧年表

寛政5年癸丑 (1793)	11. 20 <u>宮内護摩堂発起連中</u> (頼母子講、12人加入 金高120両)
寛政8年丙辰 (1796)	秋 油屋道具を購入 (治介殿より買う、桐小ため桶2・桐升2・釜1・須賀川樽3・会津樽16・漏斗2・舟2・つち矢など、計金2両2朱余) 12. 3 三日町福嶋屋治助へ金1分2朱貸し (25匁秤一丁預かり) 12. - となり庄右衛門へ金1両1分貸し (仁右衛門裏敷地証文預かり)
寛政9年丁巳 (1797)	1. 25 <u>与四郎殿発起</u> (頼母子講、土屋吉五郎ら参加) 10. 初 <u>十日町浦山三右衛門殿発起連中</u> (頼母子講、12人加入 荒井勘右衛門・三沢清右衛門・鈴木清吉ら参加) 長谷川家は2人分加入 12. - 油屋道具を購入 (桐4尺桶1、金1両3分)
寛政10年戊午 (1798)	10. - 油屋道具を購入 (桐かよひ桶2、金2分) 12. - 質に取っていた十日町鍵屋儀兵衛殿屋敷に引越す (敷金50両)。建具家具 (戸棚3・板畳6・吊り棚2・茶箱1など)・改築日雇 (大工19・平日用24など)・改築材 (板框・釘・杉皮など)・礼金 (丹野治左衛門・十日町大坂屋彦兵衛ら町人、両親・組頭・筆取・小走) に出費 (惣々59両3分余)。長谷川家が十日町へ引越し居住する。
寛政11年己未 (1799)	正〜2. - 味噌たまり仕入れにつき道具を購入 (五日町彦兵衛などより買う、2尺6寸釜1・舟1・4尺5〜9寸桶3・男柱天秤など) 3. - 油屋道具を購入 (蠟取り1、金3分余) 5. - 味噌たまり仕入れにつき道具を購入 (山口甚右衛門・旅籠町与三殿より買い、火くれ桶2・中桶2・売場舟・小道具・台・呑口桶の台1・大柄杓1・古袋50・担ぎ桶・大溜など) 12. - 味噌たまり仕入れにつき道具を購入 (水口屋より4尺桶4) - - <u>円寿寺発起連中</u> (頼母子講、16人加入 円徳寺・三右衛門ら参加)
寛政12年庚申 (1800)	2. - 味噌たまり仕入れにつき道具を購入 (5尺3寸桶1) 前年からの味噌たまり道具購入代金計12両3分余。 8. 26 <u>蠟燭町吉兵衛発起</u> (頼母子講、10人加入 村居傳八ら参加、四番引取金8両3分余) 11. - <u>青山留兵衛殿発起せり無尽</u> (頼母子講、19人加入 金高54両 市村弥兵衛・三春屋仁三郎・小嶋駒吉・岩倉多惣次・村居文蔵・大坂屋彦兵衛らが参加) - - <u>発起寺崎長次郎殿連中</u> (頼母子講、12人加入 青山次右衛門・土屋吉五郎・福嶋屋治助・大坂屋彦兵衛ら参加、文化元年まで継続)*
文化元年甲子 (1804)	
文化3年丙寅 (1806)	11. 下旬 鞘町庄右衛門殿土蔵へ借家を置く。敷賃は1年24匁、うち2朱は庄右衛門殿に遣わすことになる。
文化5年戊辰 (1808)	春 上方で道具を購入 (銅盥2・野風呂1・丸行灯1・けし唐草大皿20・同小皿20・同千代20・同引物皿20・惣金位牌1・同小1・算盤2・青貝絵吸物椀20・長持2・眼鏡1・皮靴1・屏風1双・脇差2・御文様・輪嶋漆内赤吸物椀10・同膳20・同椀10) 長谷川家の家内諸道具が充実整備される。

文政6年癸未 (1820)	―― 元佐藤長右衛門殿屋敷であった吉田利八殿屋敷（屋敷2軒前分 表間口9間）を長谷川家が譲り受ける。翌申年にかけて普請をする。年代未詳だが名前は和五郎に改める（弘化2年記す）。
文政7年甲申 (1824)	閏8. ― 山形藩が城下町人に御用金を課す。十日町・七日町・横町・八日町の75軒の町人が上納する。長谷川吉郎治は110両を上納する。
文政10年丁亥 (1827)	（長谷川家5代当主吉郎治が逝去する。）
天保元年庚寅 (1830)	12. 中旬 違作につき困窮人へ米安売りをおこなうため、十日町で備米惣高1500俵（惣町では6000俵程）が山形藩より命じられる。山形藩が柏倉藩米を購入し、その代金は十日町金銭持方（町中之金持衆）が出金する旨藩命が下る。長谷川家は100両を出金する。吉郎治は「皆金ハ御上様ニテ御取上ケ一切不戻」として藩が買米代金を出さずまた困窮人が買った安売米代金は藩が取得したことを批判している。そこで、出金を命じられた町衆一同が町用場へ訴願をし藩が出金することを願った結果、漸く藩は500両だけ出金した。
天保2年辛卯 (1831)	春 米穀違作につき十日町・鞘町・材木町へ心付け施米をする。①十日町（当町内10俵／抱屋敷組合（「新宅之組合」吉田利八・積善院・瀧屋・利惣治・大黒屋・同借屋2・安栄・横川・藤七・西谷清兵衛・西谷伊兵衛・若安借屋1・まづ）5俵2斗）、②鞘町（染屋三右衛門・種物屋庄六・大工巳之吉／鞘町中31軒）12俵2斗、③材木町（町内中／湯屋又五郎・穀屋又市・角ノ佐内・日用取忠助・専助・玄長）9俵余、④大工源吉1俵
天保3年壬辰 (1832)	―― 米穀大いに違作につき十日町備米として藩より惣高1500俵を命じられる。長谷川家は150俵分の代金を出金する。
天保4年癸巳 (1833)	―― 大違作のため湯殿山参詣道方面、津軽・秋田・南部方面から山形城下に何万人ともなく流れ込み、町中で多数が干死する。そのため、山形藩が越後大地主市嶋家から5000俵を買い受けた。また大坂へ上り米を買い入れるために町奉行土屋治部助が出張するので、紅花商人一統が上方で販売した紅花代金の三分の一を大坂買米代金に借り受けたいと命じられるが、商人は不承知で山形で出金したいと願い認められる。 <u>長谷川家はこの年150～160駄も紅花を上方へ出荷していたので紅花代金の三分の一を出すことは「誠ニ大變成事」として反対し、かわりに200俵分の代金（約200両）を出金した。</u> 惣町の困窮人への施行に遭われる。村居家・長谷川家が約200両ずつで一番多く、他の商人は100両・70両・50両ぐらいであった。飢餓と悪病のため、材木町でも多数の死者が出た。物貰いが沢山出たので、長谷川家は粥を煎り柄杓1本を用いて一盃ずつ食べさせる。
弘化3年丙午 (1846)	3. ― 長谷川家所持の材木町抱屋敷1軒（表口4間3尺、裏行30間、3間土蔵1）を材木町甚吉へ15両で永代売り渡す。

典拠）寛政5年「永代帳 長谷川吉郎治」（長谷川吉茂氏所蔵）

補注）文化元年の＊印の記事は頼母子講の発起した年が不詳のため終了年のところに記載した。

対応策を講ずるために山形藩が城下町人に御用金を命じました。その際に、長谷川家は一一〇両を上納しています。この額は、一六〇両を上納した村居清七・岩倉太惣次・川合茂右衛門の三家に次ぐ第四位に位置します。また、天保元年から四年の記事をご覧ください。天保の凶作飢饉による困窮人の救済のために、長谷川家は毎年お金を出し、施行をおこなっています。とくに天保四年（一八三三）は奥羽の各地から山形城下町に困窮人が流入し餓死者も出たため、山形藩が大坂で米を買い入れようと、その資金を山形紅花商人に出すように命じ、結局長谷川家は約二〇〇両を出金したことが判明します。この額は山形城下町のなかで村居家と並び第一位の額です。この経過からあきらかなように、山形城下町人のなかで長谷川家は、文政期には御用金の上納額が四位の有力商人となり、天保期の始めには社会的な救済資金を最も多く出す商人となったことが判明します。山形藩がおこなうべき社会的な救済事業を事実上肩代わりし、飢饉時には蓄積した富を困窮人に還元する有力商人となり、長谷川家の藩に対する発言力も増していったと思われます。

以上、「永代帳」をもとに、⑧長谷川家の成長過程を考察しました。その結果、長谷川家は一八世紀半ば以降に成長・発展した、いわば新しい勢力、新興の商人であることが明確になりました。そして、天保期には山形城下町人のトップクラスとなることから、新興商人のなかでも著しい成長を遂げた典型と位置づけることができます。その成長の背景としては、上方との紅花取引、奥州方面への遠隔地販売、無尽講や仲間取引にみられる山形商人相互の経済協力の関係、などが研究の現段階では指摘できます。とくに近世後期に需要が増

大する大衆の日用品を取り扱ったことが長谷川家を急速に成長させたと考えられると、ここではまとめておきたいと思います。

二 幕末期長谷川家の商業活動

つぎに、幕末期における長谷川家の商業活動について報告します。わたしは奥羽史料調査会という東北の近世史研究者の有志で作った会の世話人を務めています。調査会で現在、宮城県村田町の紅花商人であった大沼家の古文書調査を進めています。本家を金大沼正七家、分家を大沼正治郎家といえます。本家は現在、村田商人やましよう記念館となつています。本家正七家は⑧長谷川家及び⑨長谷川家と連携し、奥州仙南地方（仙台藩領のうち南側の地域。南仙ともいう）の紅花を集荷したり、上方や全国の物資を販売したりしていました。また、分家の正治郎は長谷川両家が出荷した紅花を京都で売る交渉をする上京支配人（長谷川家の京都での代理人）を務めました。そのため、大沼本家・分家には六代目吉郎治やその息子吉六の帳面をはじめ、長谷川家の帳簿が残されていました。これを手がかりに幕末期の商業活動について報告します^⑩。

まず、表3は安政元年（一八五四）に⑧長谷川家が京都へ出荷した紅花に関する一覧です。まず、「産地・集出荷形態」の欄では、太字で産地の別を表示しました。太字をご覧いただくと、上から、最上紅花のブロック、つぎに庄内紅花、総州紅花、武州紅花、そして奥州紅花のブロック、からなります。紅花は羽州村山の特産で有名ですが、一八世紀の半ばから奥州や関東でも生産地が生まれて来ます。長谷川家はこうした新興の紅花生産地帯に積極的に乗り出して

いったタイプと考えられます。集出荷形態の内訳は①から②まであります。表の横の補注のところに書きましたが、「造り」という言葉に後について記載されている商人名は、実際に紅花を生産地から仕入れて荷造りし出荷した商人の名前です。内造りの「内」とは長谷川家のことを指します。それから括弧で記したのは、長谷川家が単独ではなく、他の荷主と一緒に組合をつくり出荷したケースを示しています。例えば、最上紅花のところの③の場合は、実際に集荷・荷造り・出荷の実務をおこなったのは「内」つまり長谷川家の手代と天童の高木屋七兵衛という紅花商人であり、その費用は長谷川家と村田の大沼正治郎が50対50、つまり半分ずつ出して共同荷主となっていることを意味します。また奥州紅花のところの⑧⑨⑩をみると、村田の大沼家などが長谷川家と組み合い共同出資者となり、集荷・荷造りなどの実務は大沼家ないしその他の仙台藩領の商人が担当し、奥仙地方（仙台藩領のうち北側の地域）や南仙地方から紅花を集荷していることがわかります。さらに、⑪⑫⑬をみると、山形六日町の区市村屋五郎兵衛を介して南部や奥仙地方の紅花も出荷しています。共同荷主の組合で出荷したケースは、括弧がついているところ、つまり②③④⑦⑧⑨⑫の七箇所、あとの一五箇所は長谷川家が一人で費用を出し単独の荷主となっているものです。このように、様々な商人と提携・共同しながら生産地にネットワークを張り巡らし集荷していたことが特徴といえます。

ここで、表4を見てください。安政元年以外の年も含めた幕末期に確認できる、長谷川家と連携した奥羽・関東の集荷商人の一覧です。長谷川家は幕末期に生糸も集荷しはじめるので、その関係商人

が一部に入っています。これらの商人が、生産地で集荷・荷造り・出荷の実務を担当したり、長谷川家と共同荷主となって一部の資金を出したりする形で連携し、長谷川家の奥羽・関東を股にかけた商業活動を支えたといえます。いまこれらの商人の実態について調査をおこないつつあります。表4の上からみていくと、南部黒沢尻（岩手県北上市、南部藩領）の湊屋・吉田屋は黒沢尻で一、二を争う有力商人で、現在も大きな蔵が残っています。奥仙の、水沢（岩手県水沢市、仙台藩領）の穀田屋（現在、東ホテル）、南仙の、村田の大沼家や白石の石津屋もそれぞれ現地の有力商人です。庄内酒田の鍛屋は井原西鶴の『日本永代蔵』にも出てくる有名な問屋で、現在屋敷が公開されています。関東のところの古河の八百屋儀左衛門は古河藩随一の御用達商人です。武州桶川の木嶋屋、与野の山田屋もこれらの地域では知られた紅花商人です。このように、長谷川家は奥羽・関東の新興紅花生産地帯の有力商人と商業網を築き紅花の出荷を実現していたことがあきらかになりました。

表3にもどります。「荷数」の欄では、袋数で示し、全体のなかでの％を示しています。一袋には、干花（花餅）にした紅花を五〇〇匁の重さ（二八七五グラム）分を詰めます。六四袋（一二〇キログラム）で一駄に荷造りします。総合計のところをみますと、安政元年に長谷川家は一万七九二四袋を上方に出荷しています。重さにして三四トン弱。駄数で二八〇駄となります。近世末期頃の全国紅花生産量は凡そ二〇〇〇から二四〇〇駄といわれているので、長谷川家は共同荷主による紅花を含めて、全国の約一二から一四％の紅花を出荷していたことがわかります。嘉永二年（一八四九）のデータ

売代金計	純益	利益率
両	両	%
3228.59	469.68	17.02
139.99	24.87	21.60
575.56	98.82	20.73
324.07	30.85	10.52
394.90	68.62	21.03
883.17	160.04	22.13
135.99	22.59	19.92
5682.27	875.47	18.21
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
149.27	23.91	19.07
649.92	11.94	1.87
297.36	-2.92	-0.97
217.89	-5.27	-2.36
515.25	-8.19	-1.56
344.16	67.82	24.54
3213.52	527.57	19.64
1607.79	239.42	17.50
511.01	88.28	20.89
679.17	114.99	20.38
6355.65	1038.08	19.52
269.24	---	---
---	---	---
---	---	---
---	---	---
13352.36	1941.21	17.01

典拠) 安政2年2月「寅夏と卯春迄為登紅花青苧絹糸元揚げ調」(宮城県柴田郡村田町 大沼正治郎家文書)。

補注) ○○造りとは、○○が紅花を集荷・荷造り・出荷する実務を担当したことをさす。内造りとは、長谷川吉郎治家自身が紅花を集荷・荷造り・出荷したことをさす。②③⑥⑦⑧⑨⑫にある括弧で示した(長谷川吉郎治50・○○50組合)などの表記は、紅花の集荷・荷造り・出荷に必要な資金を、長谷川吉郎治家と○○家が共同出資していることを示す(荷主の共同組合による出荷を示す)。50などの数字は出資額全体を100とした場合の出資比率を示す。こうした表記がない①④⑤⑧～⑪⑭⑯については、長谷川吉郎治家が単独で100を出資し単独の荷主として出荷したことを示す。⑭⑯にある江戸廻りとは、江戸経由で上方へ向かうルートで出荷したことを示す。

表3 安政元年(1854)長谷川吉郎治家の紅花取引の実態

産地・集出荷形態	荷数	買代金計	諸掛	原価
最上紅花	袋(%)	両	両	両
①内造り	3779 (21.08)	2643.82	115.09	2758.91
②内造り(長谷川吉郎治50・米庄50組合)	196 (1.10)	109.81	5.32	115.12
③内造り・天童高木屋七兵衛造り (長谷川吉郎治50・村田大沼庄治郎50組合)	718 (4.01)	457.76	18.98	476.74
④天童高木屋七兵衛造り	407 (2.27)	281.02	12.21	293.22
⑤楯岡青沼惣次造り	433 (2.42)	313.50	12.77	326.28
⑥内造り・天童高木屋七兵衛造り (長谷川吉郎治50・斎藤長松50組合)	1093 (6.10)	695.89	27.25	723.13
⑦江俣村鈴木屋長四郎造り (長谷川吉郎治50・鈴木屋長四郎50組合)	171 (0.95)	—	—	113.40
	6797 (37.92)	—	—	4806.80
最上紅花(純益等不明分)				
⑧内造り	678 (3.78)	384.02	20.64	404.65
⑨天童高木屋七兵衛造り	1005 (5.61)	660.29	28.50	688.65
⑩寒河江八幡屋造り	164 (0.91)	—	—	106.65
⑪楯岡青沼惣次造り	34 (0.19)	21.17	1.11	22.27
	1881 (10.49)	—	—	1222.22
最上紅花計(①~⑪)	8678 (48.42)	—	—	6029.02
庄内紅花				
⑫酒田鑑屋惣右衛門造り	230 (1.28)	—	—	125.36
総州紅花				
⑬古河宿八百屋儀左衛門造り	604 (3.37)	631.76	6.22	637.98
武州紅花				
⑭武州桶川宿木嶋屋浅五郎造り	283 (1.58)	294.93	5.35	300.28
⑮江戸出羽屋喜兵衛造り	216 (1.21)	219.94	3.22	223.16
	499 (2.78)	514.87	8.57	523.44
奥州紅花				
⑯山形市村屋五郎兵衛造り 奥仙南部紅花分	380 (2.12)	268.09	8.25	276.34
⑰村田大沼正七造り 南仙紅花分	2905 (16.21)	2482.37	203.59	2685.95
⑱村田山田屋新五郎造り 南仙紅花分 (長谷川吉郎治25・村田大沼正七25・村田山田屋 新五郎50組合)	1512 (8.44)	1275.75	92.75	1368.38
⑲大沼正七造り 南仙紅花分 江戸廻し (長谷川吉郎治50・村田大沼正七50組合)	530 (2.96)	388.78	33.96	422.73
⑳山形市村屋五郎兵衛より引受け 南部奥仙紅花分 江戸廻し	801 (4.47)	479.73	84.53	564.18
	6128 (34.19)	4894.72	423.08	5317.58
奥州紅花(純益等不明分)				
㉑山形市村屋五郎兵衛より引受け	322 (1.80)	184.40	—	—
㉒奥仙米屋喜十郎造り・仙台恵比寿屋徳蔵造り (長谷川吉郎治33・村田大沼正七33・長谷川吉内 33組合)	1463 (8.16)	—	—	1037.69
	1785 (9.96)	—	—	—
奥州紅花計(⑯~㉒)	7913 (44.15)	—	—	—
小計(①~⑦・⑫~㉒) 純益等不明分を除く	14258 (79.55)	—	—	11411.16
総合計(①~㉒)	17924 (100.00) (280駄 4袋)	1駄=64袋		

表4 幕末期 長谷川吉郎治家の奥羽・関東における主な集荷商人

地域名	商人名（居住地）
南部	湊屋 専次郎（黒沢尻） 吉田屋 庄四郎（黒沢尻） 亀屋 伝助（黒沢尻）
秋田	（秋田領へ繰綿を販売）
奥仙	穀田屋 七平（水沢） 小沢屋 平治（水沢） 鈴木屋 庄左衛門（山ノ目） 金森屋 新之助（一ノ関） 千葉 新助（一ノ関）
仙台城下	恵比寿屋徳蔵
南仙	大沼正七・正治郎（村田） 山田屋 新五郎（村田） 飯淵 惣吉（船岡） 石津屋重郎左衛門（白石）*
庄内	鑑屋 惣右衛門（酒田）
山形城下	長谷川 吉内 市村屋五郎兵衛 ほか
村山郡	青沼 惣次（楢岡） 六右衛門（大町） 川嶋屋 権吉（湯野沢） 加賀屋 太兵衛（左沢）* 高木屋 七兵衛（天童） 鈴木屋 長四郎（江俣） 藤屋 惣吉（上山）*
置賜	清水屋惣右衛門（荒砥）*
福島	油屋 庄次郎（福島）* 槌屋 佐助（福島）*
関東	八百屋儀左衛門（古河） 木嶋屋 浅五郎（桶川） 山田屋幸右衛門（与野）
江戸	出羽屋 喜兵衛（江戸）

補注）*印は主に生糸を集荷（*印の一部にも紅花や青苧を集荷した者が含まれる）。

でも、長谷川家の出荷総数は二八七駄だったことが確認できます^③。嘉永から安政期において、長谷川家は日本一の紅花商人であったと推測されます。先の「永代帳」の記事では、天保四年（一八三三）に長谷川家は一五〇〇一六〇駄を出荷したとあるので（表2の天保四年記事のアンダーライン部分を参照）、天保から嘉永・安政期にかけて長谷川家はさらに倍近くの量を扱う紅花商人として発展を遂げたこともあらたに判明しました。

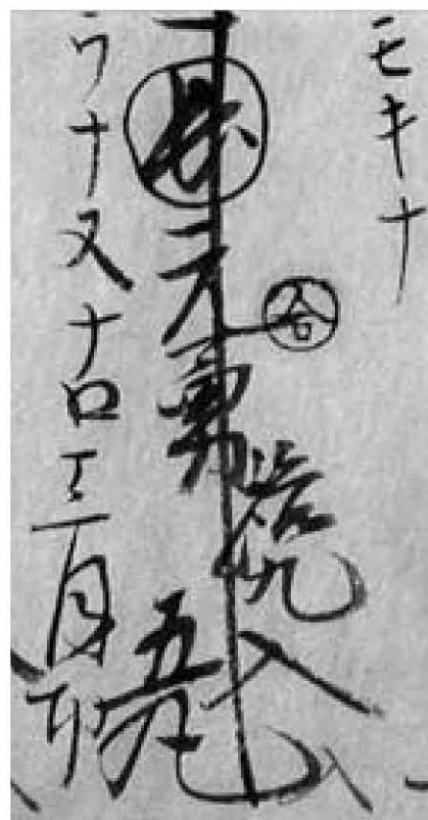
荷数を産地別に検討しましょう。表3の最上紅花計のところをみてください。八六七八袋で全体の四八％です。地元の最上紅花が一番多いことがわかりますが、全体の半分以上であることも注目されます。つぎに、奥州紅花計のところをみてください。七九一三袋で四四％です。庄内・総州・武州はそれぞれ数％です。ここから、最

上紅花と奥州紅花が出荷の中心であったことが指摘できます。

ここで、紅花帳簿の記載法に関心のある方がいらつしやるかと思えますので、長谷川家の帳面の一部をご紹介します。嘉永二年（一八四九）の帳面にある紅花荷の記載の一例につき写真と解説文を載せました。紅花の荷印が㊦、銘柄が元勇という紅花に関する記載です。この紅花は一九袋入った荷物（丸）が五つ（袋数では九五袋）からなることがわかります。さて、荷印㊦の両脇に書いてあるカタカナは何を意味するのかがここでの問題となります。まずカタカナは、符牒（ふじょう）（符帳・符丁）という、一種の暗号です。村田町の大沼悦子さんにお聞きしたところ、長谷川家の符牒は一・二・三・四・五・六・七・八・九・零（ぜろ）（〇）の各数字を順にヨ・ロ・ツ・ア・キ・ナ・イ・カ・ノ・ヲ（しめ）の代わりにあるいはメを用いる

場合もあった)で示していたと言ひ伝えられているとのことでした(大沼両家も長谷川家と同じ符牒を使っていました)。萬商いがうまく行きますように、という願いが籠められております。ご教示をいただいて解説が進んだのですが、しかし、符牒にないモやウも混じっています。最初は意味不明でした。しかし、諸帳面のあちこちの数値を照合して検討した結果、最初に「モ」がつけられた右側のカタカナ(モキナ)は一駄あたり(つまり六四袋あたり)の京着(長谷川家がその紅花を生産地で集荷し荷造りし運送して京都に着くまでにかかった総経費。いわば原価のこと)を示す符牒であることがわかりました。また、最初に「ウ」がつけられたカタカナ(ウナ又。又は上の字と同じ字がまたくることを意味する。ここではウナナとなる)は値打(長谷川家が京都で紅花を販売する時の希望販売価格)を示す符牒であることが判明しました。したがって、この紅花一駄あたりの京着はキナですから五・六、すなわち五六両であり、値打はナ又(ナナ)ですから六六両となります。そして、「ナロ十二月切」と書き込まれた記事は、一二月を期限に一駄あたり六二両の仕切値段で売却する約定をしたことを示します。写真からは、他の帳面と照合したことが㊦印から、また、取引が終了したことが荷印銘柄の上から引かれた線から、わかります。

このように符牒と記載様式を読み解くことで、個々の紅花荷の京着(原価)・値打(希望販売価格)・仕切値段(売却価格)の実態が判明します。また、相互関係をみることで、当初の販売利益の目標や、実際の利益と利益率もあきらかとなります。符牒が使われたのは、売買交渉の時に、買手に帳面を覗き込まれても原価などがすぐ



京着	56両	モ	キナ	一、 Ⓢ長	ウナ又	値打	66両
拾九入	入	元勇	五丸	ナロ十二月切	62両		

Ⓢの符牒

ヨ	ロ	ツ	ア	キ	ナ	イ	カ	ノ	ヲ	(x)
1	2	3	4	5	6	7	8	9	0	

にわからないようにするためです。京着の符牒であることを示す最初の字をモにしたりスにしたりと、時々変えたりもしています。こうした仕掛けは、商いの現場（例えば売買交渉の場）で使用された帳面ほど施^{ほどこ}されているので、一つ一つ符牒の意味を検討していくことで紅花取引の数値的な実態がようやく分析できるのです。

表3にもどります。「買代金計」以下の欄は、個々の紅花についてこうした符牒を読み解き、さらに他の帳面から判明する売代金（仕切値段から京都紅花問屋へ渡す口^{こう}銭（「一〇一・五%」を差し引いた金額）なども把握し突き合わせて、それを集荷商人毎に集計して得られた結果を表示しています。純益は売代金計から原価を差し引いた額です。利益率は原価（投資額）に対していくら儲けたのか、その比率を示すもので、純益を原価で割り一〇〇を掛けた数値です。数値が判明する紅花の利益率をみますと、主力である最上紅花の平均は一八・二一%、奥州紅花の平均は一九・五二%です。一方、総州と武州は低く、武州紅花に至ってはこの年マイナス、つまり赤字です。武州紅花はいつも赤字というわけではないのですが、その年の天候により品質が大きく変化するのが紅花の特徴です。この年、不作で品質が危ぶまれた総州や武州の紅花の買い付け量を長谷川家はいつもの年よりも少なくしています。そのため、赤字の影響は最小限に抑えることができました。結果として、安政元年の紅花の全体的な平均利益率は、数値が判明するもので一七%余と当時としては高い結果を得ています。利益率の計算はまさに商人のように算^{そろばん}盤をはしく感覚で出来るのですが、そのためには、商人毎に異なる符牒を解説し、さらに解説できた数値が値打なのか、京着なのか、仕

切値段なのかを分別していく作業が必要です。他の商人の帳面でも類似した記載はみられる場合があるので、今後の紅花商人の研究でひろく使用できる分析の方法だと考えています^⑩。

さて、最上紅花は全国のブランドであり、一般的に村山の豪農や商人は儲けたといわれます。幕末に刷られた、諸国特産物の番付表でも最上紅花は上から三番目に相当する東の関脇に位置しています。しかし、実際に京都紅花相場を調べてみると、一八世紀まではよかったが、一九世紀に入ると、奥州紅花をはじめ新興生産地帯の紅花の方が品質がよく市場に出回ったため、最上紅花は京都市場での競争に敗れて産地別では一番低い値段で取引されるのが実態でした^⑪。その原因は、全国の紅花生産量のほぼ半分を村山地方で生産していたように大量生産に走り、同じ畑で続けて栽培をしたため連作障^{れんさくしょうがい}害がおこりやすく花の質が低下したなどによります。ただでさえ紅花は年によつて豊凶の差が激しく相場が変動するのに、村山の場合はさらに品質が悪くなったことにより、最上紅花の一般的な利益率は一八世紀までと比較して低下していききました。わたしは谷地の堀米四郎兵衛家（現在、河北町紅花資料館）の研究をおこなっていますが、堀米家クラスの大豪農でも出荷量がピークの時で利益率は一〇%余であり、悪い年には大赤字^{おほあかじ}となり、相場変動のリスクを堀米家が被^からないように躍起となっていたのが実情でした^⑫。一九世紀には最上紅花は危険な商品となっており、山辺町大蔵^{おほくら}の豪農稲村家は分家への教訓として「紅花商いの儀は仏様も苦言を述べており商いをしてはいけない」と紅花商業への安易な参加を戒めています^⑬。それに比べて、長谷川家は他の年のデータも検討すると、品質のよい奥州紅花

などで利益率が良いのはもちろん、最上紅花についてもあまり損失をださず比較的安定した高い利益を出しています。なぜ長谷川家は最上紅花でも高い利益を出せたのか。その背景を検討するために、表5を検討したいと思います。

表5は嘉永三年（一八五〇）に出荷した最上紅花の一覧表です。この年の帳面には、先に符牒のところで指摘した京着や値打が書かれているほか、その紅花がどこで作られたのか、仕入れた場所が書かれていました。最初の番号1、㊦極緋（極々赤い色という銘柄）という紅花の備考欄をみますと「山形地廻り前田村買入百姓手干」とあります。「山形地廻り」とは山形の周辺地域を指します。山形城下町に近い前田村で買入れたもので、その百姓が自ら干した紅花である、という意味です。こうした見方で表をズツとみていくと、長谷川家の最上紅花の集荷範囲があきらかとなります。仕入れ地の一番北は番号71・72の下郷楯岡廻り（楯岡の周辺地域）や長瀬村、あるいは番号65の天神湯沢村（現村山市湯野沢・葉山東麓）あたり、南は村山盆地のなかですと番号26や34などの上山在、つまり上ノ山城下町の近郊農村です（長野村・小倉村など）。また、それよりもさらに南となりますが番号32は米沢藩領の小岩沢村（現南陽市小岩沢）から集荷しています。多いのは村山盆地の平野部で、「山形地廻り」や「中通り」と呼んだ山形よりも少し北側の地域、さらに「最上川通り」と呼んださらに北へ延びる最上川沿いの村々です。盆地の平野部中央を中心に、周辺も覆う形で、長谷川家が最上紅花を村々から集荷していることがわかります。山形城下町の巨大商人クラスの、最上紅花の集荷地が特定の年について全てわかる極めて貴重なデー

タだと思えます。

さて、さきほどの長谷川家が出荷した最上紅花は高い利益率を得ていることとの関わりで注目したいのは、表5の備考欄のなかでアンダーラインを引いた記事です。例えば番号10の小町紅という紅花については「青柳村百姓より買入、撰び品」と書かれています。つまり紅花の品質を選んで買った、という意味です。アンダーラインを引いた記事のなかで、一駄あたりの値打が七〇両以上つけられた紅花をみていくと、番号16の佐印「最上川通り極上品撰び抜き買入れ希品也」、番号22の佐印「最上川通り極第一之上場撰び買入れ分」、番号51の音姫「最上川通り極々第一之場より撰び抜き極稀れ之上品也」などがあります。表で示した八二の紅花のうちの二七、つまりほぼ三分の一の紅花について「上場」「撰抜」「極稀」「揃品」などの記載があり（直線のアンダーラインの箇所）、産地で品質のよい紅花を選抜して仕入れていることが判明します。こうした紅花はほぼ同じ地域の他の紅花と比較すると値打も高目であることが確認できます。また、百姓の名前や屋号が特定できる記載は合計八箇所あります（波線のアンダーラインの箇所）。例えば、番号31の「山形地廻り落合長九郎手干」とあるのは落合村の長九郎が干花（花餅）加工をした生産者であるという意味です。

長谷川家が出荷した紅花について産地や品質、生産者を帳面に記録したのは何故でしょうか。一つには、こうした記録を蓄積することで利益があがる紅花の産地と生産者を掌握していくことができます。二つには、この情報を京都で紅花の売り付けを担当した大沼正治郎（上京支配人）に長谷川家が伝えていたことをふまえば、産

表5 嘉永3年(1850)長谷川吉郎治家の紅花荷一覽(最上紅花分)

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値	一駄あたり 値打	原価	備考(仕入地など)
① 内造り分						
1	②極緋	84	45.938	56.0	60.29	山形地廻り前田村買入百姓手干
2	②沖姫	90	50.68	61.5	71.27	山形地廻り沖原村買入百姓手干
3	②司印	98	54.50	62.5	83.45	中通文右衛門新田村百姓手干
4	②司紅	106	52.865	60.0	87.56	山形廻り印役 中通文右衛門新田村合
5	②重司	77	52.293	64.0	62.92	山形廻り十文字村百姓手干 中通長崎村合
6	②重紅	72	49.771	59.0	55.99	山形廻り十文字村買入 但百姓手干
7	②谷風	99	50.878	59.0	78.70	山形も二り半先風間村百姓手干
8	②緋柳	77	49.75	59.0	59.86	山形廻り青柳村百姓買入分
9	②雨揃	184	52.245	64.0	150.20	山形も二り先半志村買入百姓手干
10	②小町紅	86	53.02	65.0	71.24	青柳村百姓寄買入撰品
11	②長司	170	49.862	59.0	132.44	長町村百姓撰買入
12	②名月	102	57.137	67.0	91.06	最上川通寺津撰買入分上品也
13	②灰光	213	55.952	65.0	186.22	最上川通灰塚村百姓千分
14	②金冠	179	56.425	63.0	157.81	最上川通元楯村買入百姓寄買撰抜分上品
15	②小柳	87	49.423	59.0	67.18	山形廻り青柳村百姓手干
16	②佐印	78	59.035	72.0	71.95	最上川通櫃上品撰抜買入稀品也
17	②本緋	174	57.535	67.0	156.42	最上川通寺津村百姓手干寄買
18	②三軒家	71	55.535	63.0	61.61	最上川通三軒家村百姓手干
19	②紅馬	111	42.866	53.0	74.35	山形廻り商人千分
20	②荒熊	104	46.305	55.0	75.25	山形廻り東山蔦木村熊ノ目村百姓千合
21	②妙光	87	42.40	50.0	57.64	山形廻り妙見寺村百姓手千分
22	②佐印	321	60.359	70.0	302.74	最上川通櫃第一之上場撰買入分
23	②大嶋	133	57.359	65.0	119.20	最上川通嶋村と申上場百姓手干撰品也
24	②宝稀	121	50.12	60.0	94.76	宝沢村松ノ月と申上場百姓手干
25	②宝雨	64	47.448	60.0	47.45	中宝沢村百姓手干
26	②金時	128	50.834	60.0	101.67	上ノ山在長野村小倉村百姓手干寄拔上品合
27	②灰光	193	57.50	65.0	173.40	最上川通灰塚村百姓寄買入上品分撰合

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京著値	一駄あたり 値打	原価	備考（仕入地など）
28	⑨灰光	袋 83	両 56.75	両 63.0	両 73.60	前書回断買入分 允天屋手千分
29	⑨国司	75	55.22	60.0	64.71	最上川通寺津落合村灰塚村より買合
30	⑨小町姫	139	49.76	65.0	108.07	中通七浦村三條目村百姓手千分合
31	⑨飛光	70	49.495	60.5	54.14	山形廻り落合長九郎手千 中通百姓手千分合
32	⑨仙岩	19	60.456	75.0	17.95	米沢小岩沢百姓手千寄抜半
33	⑨正灰光	132	56.86	66.0	117.27	最上川通灰塚村極選百姓手千分合
34	⑨正金時	137	49.806	57.0	106.62	上山在百姓千買抜上品撰分 金時同様
35	⑨飛頭	99	51.86	60.5	80.22	中通達磨長崎百姓手千分
36	⑨盛光	87	49.54	60.0	67.34	山形も三り余先キ山八森村百姓千
37	⑨勘紅	115	46.773	53.0	84.05	山形廻り落合村勘七手千 同村又迫郎台
38	⑨黒雲	75	39.295	55.0	46.05	諸方集取品合 下花
39	⑨仙大谷	43	55.278	67.0	37.14	南仙上品買入分
40	⑨西光	27	44.817	54.0	18.91	山形も西ノ山七ツ松村
41	⑨寺新	104	49.995	60.0	81.24	最上川通寺津落合村松兵衛手千
42	⑨松露	74	51.776	61.0	59.87	下郷羽入村百姓千 寺津落合商人千分合
43	⑨大関	68	52.469	62.0	55.75	最上川通中目村二位田村合
44	⑨柳光	69	48.983	59.0	52.81	山形廻り青柳百姓手千
45	⑨龜山	72	50.00	59.0	56.25	山形廻り風間村百姓千 但袋二而買入候処目方輕キ
46	⑨竹光	49	50.00	59.0	38.28	山形廻り風間村百姓千 但袋二而買入候処目輕有之
47	⑨舞鶴	71	50.50	58.0	56.02	山形廻り風間村百姓寄買 上品
48	⑨松風	72	49.00	57.0	55.13	山形廻り風間まんどや手千
49	⑨紅梅	156	45.839	55.0	111.73	山形も三り先キ東山休石村百姓千
50	⑨灰長	98	53.824	61.0	82.42	最上川通灰塚村長左衛門手千
51	⑨音姫	218	61.242	70.0	208.61	最上川通櫃々第一之場寄撰抜半極稀之上品也
52	⑨浦嶋	68	58.045	66.0	61.67	最上川通向長崎まれ極上品抜買入合也
53	⑨天下一	74	59.544	71.0	68.85	最上第一之高山田代村と申処百姓千寄撰抜買入
54	⑨市娘	76	51.234	61.5	60.84	中通商人手千揃品也
55	⑨檣旭	168	49.156	59.0	129.03	山形廻り落合村百姓千分合
56	⑨大頭	73	54.091	62.0	61.70	最上川通長崎村百姓手千
57	⑨劍山	64	50.805	60.0	50.81	山ノ辺百姓大寺村百姓手千分合
	袋	6007				

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値	一駄あたり 値打	原価	備考（仕入地など）
② 大町村 六右衛門殿造分						
58	⑩大光	78	56.863	68.0	69.30	下郷大町村百姓手干
59	⑩大排	84	56.19	67.0	73.75	下郷大町村百姓手干
60	⑩清水	105	50.464	63.0	82.79	下郷大町村大清水村百姓手干台
61	⑩大司	86	49.617	62.0	66.67	下郷今町成生大清水百姓手干
62	⑩大寶	42	50.462	56.5	33.12	下郷成生大清水百姓手干台
63	⑩古今	64	55.665	62.0	55.67	下郷谷地在田井村百姓手干
64	⑩清瀧	105	55.553	63.0	91.14	下郷大清水寄拔主極稀品
	袋数	564				
③ 天神湯沢 川嶋屋権吉殿						
65	⑩名山	38	50.809	64.0	30.17	下郷天神湯沢村川嶋権吉殿俵手干
	袋数	38				
④ 天童 高木屋七兵衛殿造り分						
66	⑩関ノ戸	158	50.096	59.0	123.67	下郷小関村百姓手干
67	⑩山姥	40	51.225	56.0	32.02	下郷小関高木村百姓手干
68	⑩鏡岩	83	52.04	61.0	67.49	天童老ノ森百姓寄抜買入分
69	⑩猪玉山	176	53.00	61.0	145.75	下郷高木村百姓手干 極吟味寄抜買入
70	⑩最一	74	52.171	59.0	60.32	天童廻り百姓手干 上品
	袋数	531				
⑤ 楯岡 青沼惣治殿造り分						
71	⑩金王山	68	49.666	58.0	52.77	下郷楯岡廻り百姓寄買
72	⑩長稀	72	57.329	68.0	64.50	下郷長どろ村百姓衆手干 極撰上品之分
73	⑩清姫	41	57.359	72.0	36.75	下郷極第一之場百姓撰買入上品也
	袋数	181				
⑥ 江俣村 鈴木屋長四郎殿造分						
74	⑩玉川	146	56.04	63.0	127.84	最上川通百姓手干 寄抜買入分
	袋数	146				下店調分品也 納勇殿へ差向置

番号	荷印・銘柄	荷数	一駄あたり 京着値	一駄あたり 値打	原価	備考（仕入地など）
⑦ 江保村 鈴木屋長四郎殿組合分						
		袋	両	両		
75	国音羽	76	56.0位	64.0	66.50	
76	国清水	32	50.0位	60.0	25.00	
77	国吉田	105	53.00	61.0	86.95	
78	国力七	85	50.00	58.0	66.41	
	国組合分	298				
⑧ 寒河江造り 天童造り分 ⑨五分 至五分 組合						
79	⑨寒紅	139	52.678	65.0	114.38	寒河江八幡屋手千分
80	⑨高谷	103	53.03	67.0	85.35	最上川通高谷村百姓手千
81	⑨国一	69	47.174	59.0	50.86	天童廻り百姓手千
82	⑨国一印ノ内へさし	11	44.917	56.0	7.72	
	袋数	322		諸経費込計	267.99	

典拠) 嘉永3年9月「為登紅芋糸元揚り取調帳」(宮城県柴田郡村田町大沼正治郎家文書)。

補注) *1 小数点以下は10進法である。京着値を除き、原則として四捨五入により小数第2位までを表示した。帳面にある永貫匁および銀貫匁の記載は金に換算した。

*2 原価＝袋数÷64×京着値。

*3 番号79～82の紅花荷については一駄あたり京着値記載がなく、寒河江や天童の干花生産者から集荷した時点での原価（一駄あたり素上り）が記載されており、京着値欄に斜体字で表示した。同様に、原価欄の斜体字の数字は、一駄あたり素上り×各荷物袋数÷64袋（1駄）で計算した数値である（帳面記載の数値である）。82番の原価欄の斜体字数字の下にある諸経費込計とは、番号79～82の原価欄の斜体字数字の合計に長谷川家（大沼家との組合）が買入れ後に支出した諸経費（役金・荷造入用・運賃・取引立会手当・礼金酒手・口銭など）を足した合計（すなわち、これらの荷が京都に着くまでに要した原価の総計）である。

*4 番号①～⑨の集出荷形態は帳面の記載順に表示した。商人名などの表記法も帳面のままとした。

地や生産者名を記録し品質が良いことの裏付けとなる情報を上京支配人に知らせ、京都での西陣染職人らに対する売買交渉を説得的に有利に進めることができたと考えられます。すなわち、同じ村山盆地のなかでも、良質の紅花を生産する地域や生産者が分化ないし特化しつつあり、その情報が市場でもある程度知られるようになっていたのかも知れません。ともかく、長谷川家はそうした生産地や生産者を連年記録することで、いわば特約の仕入れ関係を結びつつあったのではないかと。実際に最上川沿いの灰塚村など特定産地から継続的に良質な紅花を集荷しています。生産地側の史料も調べつつありますが、長谷川家が生産地に入り品質のよい紅花を選び買い、その結果、最上紅花についても高い利益率を確保できた条件としては、第一に生産地・生産者・品質などの帳簿管理にあらわれた生産地掌握のレベルの高さと、第二に大量購入することで安定した仕入れ関係を継続しうる商人資本としての巨大性、を指摘しておきたいと思えます。こうした条件が長谷川家の集荷する最上紅花の利益性を確保し、同家の商業的な蓄積を支えたと考えます。最上紅花以外の奥州紅花などで選抜買い付け方式を採用していたかどうかは今後の検討課題ですが、奥州紅花の極めて高い利益率からして同様の方式が採られていた可能性がありそうです。ともかく、巨大商人長谷川家の発展のひとつの鍵として地元、最上紅花の産地掌握の強さが指摘できる、と考えています。

さて、つぎの図をご覧ください。幕末期に、⑤長谷川家が上方や江戸と奥羽地方を結ぶ、全国的なレベルの商業網をいかに張り巡らしていたのか、を示すものです。先にふれました宮城県村田町の

沼正七家の様々な帳簿や証書類などを解説し突き合わせて作成したものです。真ん中に大沼家の本家正七家・分家正治郎家が書いてあり、左には長谷川吉郎治家、分家の長谷川吉内家、が書いてあります。大沼家に入荷する商品や金銭の流れを図示しました。順次矢印を追っていた、できれば幸いです。

大沼家は長谷川家から資金の提供を受けて、あるいは自己資金をプラスして、紅花を村田町周辺から仕入れたり、他の村田商人から仕入れます。さらには広く南仙地方の都市である白石、大河原、角田、船岡や、もう太平洋に近い亘理町の商人からも紅花を仕入れています。集荷した紅花の多くを、大沼家は奥羽山脈を越えて山形方面に出荷し、最上川を下し、酒田湊を経由して、日本海の北前船を使って西廻り航路や北回り航路などのルートで運び、京都・大坂の紅花問屋へ届けます。また、大沼家は、集荷した紅花の一部を、奥州街道などを南下させて江戸へ出荷し、江戸の廻船問屋を通じて船に積み込み浦賀を経由して東廻り航路で大坂へ運び、淀川を遡って京都紅花問屋などへ届けます。紅花を預けられた京都・大坂の紅花問屋は京都西陣に紅花を販売する仲介をします。実際の売り買いの交渉は、長谷川家の上京支配人として京都へ派遣された大沼正治郎などが京都西陣の染職人と相対しました。紅花の代金は紅花問屋、なかでも最上屋喜八という長谷川家と得意関係にある京都紅花問屋に集められ、最上屋が代金を逐次、大坂商人に渡していきます。大坂商人は長谷川家より指定された全国物資や上方商品を購入し、多くを日本海の北前船で酒田湊へ運びます。帰り荷は、最上川を遡って山形城下の長谷川家へ届けられ、長谷川家より奥羽山脈を越えて

全国物資・上方商品（木綿反物・雜物・古手・綾袴・蠟・砂糖・塩など）



南仙地方の各都市の商人に運ばれます^⑧。村田の大沼家ははじめ白石の石津屋、大河原の大沼家、角田の竹岡家や亘理の渡部家などが長谷川家から送られてきた全国物資・上方商品を受け取り、周辺に販売します。さて、その代金は誰が回収しているのがポイントとなります。お金の矢印をみていくと、大沼家がこれらの商人が販売した商品の代金を集めていることがわかります（大沼家では「南仙取引^{なんせんとりひ}」と呼称）。そして、大沼家はその代金を翌年の紅花の買い付け資金にあててゐるのです。そして、翌年の取引がスタートするという、商品・資金の巨大な循環・サイクルがみられることがわかりました。そのほかにも、長谷川家の大坂からの帰り荷が浦賀を経由して仙台商人に送られ、仙台から代金を大沼家が回収したり、大沼家と水沢城下の穀田屋との関係、南部黒沢尻の商人との関係があり、そのほか南仙地方の大豆や米も取引するなど、いろいろな商業金融のネットワークが有機的な関連をもち、広域的な商業網が形成されていたことがわかってきました。大沼家は自己資金で上方との取引も独自におこないましたが、同時に長谷川家と提携したこの巨大な商品・資金の循環・サイクルに自己を位置づけ、南仙地方を代表する紅花商人として天保期以降急成長しました。大沼家は、いわば長谷川家の巨大な商業ネットワークにおける南仙地方のセンターとしての位置にあったということが出来ます。

先に表4でみたように、長谷川家は長沼家のほかにも、黒沢尻から江戸までの奥羽・関東の各地の有力商人と連携していました。おそらく、大沼家はどの取引規模ではないとしても、長谷川家はこれら各地の有力商人との間でも類似的、商品・資金の循環・サイクル

を築いていたのではないかと考えています。今後さらに検討を進めたいと思います。

おわりに

―長谷川家の歴史的位置―

以上、⑧長谷川家の成長過程と幕末期の商業活動の実態について述べました。それでは最後に、報告の冒頭にふれた、仮説としての「奥羽の商都」山形論との関わりで、この長谷川家の実態がどう位置づけるのか、について述べて、まとめたいと思います。

冒頭に掲げた資料1から3に書いてあります山形城下町の中継商業地としての発展ぶりについて、個別商人の実態から裏付けをとることが現在の課題だ、と冒頭で述べました。結論をいえば、今日報告しました長谷川家の実態は、その裏付けとなる有力かつ典型的な事例となると考えます。

「永代帳」その他の史料から今回あきらかにしましたように、長谷川吉郎治家は一八世紀半ば以降に成長・発展した、いわば新興の商人としての歴史的な位置にあるといえます。そして、長谷川家は幕末期に、山形藩の士格御用達筆頭として、まさに山形商人の頂点に立った巨大商人であり、その紅花出荷量は日本一であり、行きは紅花、帰りは全国や上方の物資で儲けるという「のこぎり商い」の商業網は南奥羽を覆う広がりをもっていたことがあきらかとなりました。おそらく、南部や秋田を含む北奥羽や関東の一部にもネットワーク

を張り巡らし、巨大な商業活動を展開していたと考えています。

そして、長谷川吉茂氏のご教示によれば、長谷川家が後年（明治期）に作成した「長谷川家履歴書」には、六代目吉郎治は弟の和五郎、吉内と協力し「商法大二成り、為め二奥羽ノ大坂トモ云ハレシ位二商法ノ盛大ヲ極メタリ」（傍点は岩田）と書かれています²⁰。長谷川家は「奥羽ノ大坂」である、つまり天下の台所である大坂になぞらえて、山形長谷川家が奥羽の商業の中心である、と世間から云われていると書かれています。家譜ともいえる自家の履歴書にこのように書いたということは、おそらく長谷川家の自己認識でもあったととらえますが、「奥羽ノ大坂」という認識は、本日の報告の内容からもう一定度の裏付けをとることができるものだと考えます。

さて、同じ御用達クラスである十日町^{ヤマジウ}半佐藤利兵衛家の調査を横山先生とご一緒にさせていただいたことがありますが、保存されている証文類などから、佐藤家も村山地方は勿論、南部・秋田・奥仙・南仙・福島・関東の商人と商業金融関係を結んでいることが検証できます。長谷川両家・佐藤利兵衛家・村居清七家・福嶋屋治助家など、御用達クラスの巨大商人は、共通して奥羽を覆う商業網を張り巡らしていたと考えられるのではないかと。また、わたしがこの間検討できた、十日町の中村喜兵衛家（現在、獺丸太中村）の場合は秋田横手地方を、三日町の小嶋源兵衛家の場合は福島^{しんどう}信達地方をそれぞれ得意先とし商圏としています²¹。これら中堅商人の場合も、巨大商人ほどの大きさではないにしても、現在の山形県域を超えた奥羽地方の一部に進出し、幕末期に成長していったことがあきらかです。また、資料1で奥州三春と山形が商業関係をもっていたとあります

が、この前、三春町に行ってきました。調査をしたら三春町周辺では紅花を生産しており、山形商人と紅花や蠟の取引をしていることが断片的な史料ではありますが確認できました。このことも含めて、資料1から3で書かれた内容のうち、少なくとも奥羽の中継商業地としての山形城下町の発展に関する指摘は事実であり、巨大商人を典型として、また中堅商人を広い裾野として、奥羽をまたがる商業網が近世後期から明治前期にかけて展開していたことが裏付けられるのではないかと考えています²²。

奥羽の中継商業地としての発展の諸条件をどのように考えるのか、現時点での試論を参考までにレジュメに載せました²³。その論点はいくつもありますが、例えば、村山地方には大きな藩がない、いわば「非領国」であるという政治的条件がむしろ山形商人の自由活発な経済活動の条件となったなどの諸点を考えております。いわゆる藩領国下の城下町商人とは異なる類型として「非領国」下の都市商人を設定し、その発展条件を全国的な視野で比較検討できないか、などと構想しつつあります。さらに、幕末維新时期における山形商業の発展²⁴がその後の近現代山形の歴史や風土にいかなる影響をもったのか、などを含めた、「奥羽の商都」山形論の全体については、また別の機会にお話しさせていただきたい、と思います。本日は、そうした基礎作業として、山形の巨大商人²⁵長谷川家の商業活動について報告することに集中させていただきました。ご静聴ありがとうございます。

注

- (1) 山形城下町商人に関する個別実証研究は少ないが、横山昭男「近世後期における紅花流通と城下町商人の存在形態―最上紅花問屋佐藤家を中心として―」(『歴史の研究』第一四号、一九七二年)、前森礼介「幕末期における城下町商人の一考察―山形佐藤利右衛門家にみる店経営―」(『山形史学研究』第一〇号、一九七四年)、岩田浩太郎「山形城下町商人長谷川吉郎治家における紅花取引の実態―嘉永・安政期を中心に―」(『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』創刊号、二〇〇五年)、高橋信敬「山形の薬本舗『黒田玄仙』と湯殿山行者」(山形郷土史研究協議会『研究資料集』第二九号、二〇〇七年)がある。
- (2) 岩田浩太郎「紅花商業と東北」(『山形大学公開講座山形の魅力再発見報告集』山形大学都市地域学研究所・山形県生涯学習文化財団、二〇〇三年)、など。
- (3) 渡辺徳太郎(述)「山形商業談」(『山形自由新聞』明治三五年一月〜三六年一月連載)、『山形市史資料』第四一号、山形市史編集委員会、一九七五年、に収録、後藤嘉一「山形商業史話」(山形経友会、一九五七年)。戦前や敗戦直後の主な基本文献として、山形商業会議所編『山形経済志料』第一集〜第六集(大正一〇年一〇月〜昭和六年四月刊。復刊合本、郁文堂書店、一九七〇年)、川崎浩良『山形の歴史』(出羽文化同交会、一九四九年)、など。
- (4) 『天童市史編集資料』第九号(天童市史編さん委員会、一九七八年一四二〜一四五頁)。
- (5) 『山形市史編集資料』第一三三号(山形市史編集委員会、一九六八年一〇〇〜一〇五頁)。
- (6) 『山形経済志料』第一集(前掲、復刊合本版)四四〜四五頁。
- (7) 『山形市史』中巻(山形市、一九七一年)五九二〜五九三頁。『山形市史』中巻は、山形城下町の概要を知る基礎文献として現在も有益である。主に藩政文書・株仲間文書・地誌・随筆・紀行文・商人鑑などの史料や聞き取りを用いている。商家文書に基づく叙述は少ないが、市村屋一統や浜村伊惣治家に関する叙述は参考になる。
- (8) 以下は、長谷川博明氏・長谷川吉茂氏よりの聞き取りによる。さらに、長谷川吉茂「長谷川家の歩み」第一編〜第四編(原稿、一九九九〜二〇〇〇年)を参照。なお、木村重道「私の思慕する人―長谷川コレクションを収集した三代長谷川吉三郎さんのこと―」(『長谷川家新寄贈作品集』山形美術館、一九九六年)も参考となる。報告当日、会場より長谷川家は近江商人かどうかという質問をいただいたが、本文に記したように現在までの管見では近江商人であることを示す資料や伝承はない。長谷川家にもそのような家伝はない。
- (9) 長谷川吉茂氏所蔵、寛政五年「永代帳」(長谷川吉郎治)。
- (10) 以下は、大沼正七氏所蔵文書及び大沼悦子氏所蔵文書による。
- (11) 今田信一「最上紅花史の研究」(井場書店、一九七二年)三四頁。
- (12) 岩田前掲注(1)論文の表2参照。
- (13) 岩田浩太郎「商品流通と『着値』―遠隔地間取引における荷主の価格計算・損益管理―」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇三集、二〇〇三年)。村山の紅花荷主を事例に、近世商人の商品原価計算・損益管理に関わる記帳法について考察したので参照されたい。また、長谷川家の紅花取引における京着・値打・仕切値段や利益率の実態に関する詳細な分析については、岩田前掲注(1)論文を参照されたい。
- (14) 岩田浩太郎「豪農経営と地域編成(二)―全国市場との関係をふまえて―」(『山形大学紀要(社会科学)』第三三巻第一号、二〇〇二年)とくに図2参照。
- (15) 岩田浩太郎「豪農経営と地域編成―全国市場との関係をふまえて―」(『歴史学研究』第七五五号、二〇〇一年。補訂版を『山形大学紀要(社会科学)』第三三巻第二号〜第三四巻第一号、二〇〇二〜二〇〇三年、に連載、ほか)。
- (16) 山形大学附属博物館所蔵、稲村七郎左衛門家文書。
- (17) 報告当日は割愛したが、以下の論点を補足したい。
山形城下町巨大商人が紅花産地で選抜買い付けという集荷方式をとっていたことの「発見」は、村山地方の紅花商人相互の間で、いわば仕入れ競争が展開していたことを推測させる。長谷川家が選抜買い付

けをした後に、残りを集荷した他の商人や豪農が相対的に品質の劣る紅花を手にはせざるをえないケースが想定される。幕末期に発展する紅花商人のなかでも、在村の大規模豪農クラスとともに、さらに山形城下町の御用達クラスの商人がより成長・発展していく実態があり、ひとくちに豪農・豪商といってもさらに巨大化していく家と停滞ないし没落していく家とがみられる。幕末期村山地方の豪農商間をも含む激しい階層分解の背景について、新興紅花生産地帯の形成による産地間競争の激化↓最上紅花の利益率の一般低下↓紅花商業リスクの増大という状況における激烈な仕入れ競争を視野に入れて考察すべきことが、長谷川家の事例から指摘できよう。わたしは、堀米家の事例（自分荷・仲間荷・為替取組）という出荷形態の選択から、紅花相場変動のリスクを中小商人（仲買）に転嫁する大規模豪農の経営方式について考察したことがある（岩田前掲注（14）論文）が、長谷川家の事例にみる選抜買い付けという集荷方式も、堀米家とは別の形態ではあるが、紅花商業のリスクを回避し一定の利益率を得るための方式として共通の性格をもつといえる。

特産物商品生産地帯の階層分解論を、その特産物商品市場の特性と全国動態、その影響下における荷主による産地掌握Ⅱ流通編成の方式、とリンクさせて論証していくことが重要である。そして、産地に対する長谷川家の動向をふまえるならば、村山地方の農民層分解の要因論を農村内部で完結させてはならず、山形城下町商人の産地に対する経済関係をはじめとする都市―農村関係を十分に組み込んで検討していくことが求められるといえる。従来、村山地方の農民層分解論は農村内部の考察で完結されてきた嫌いがあるが、それは「はじめに」で述べた村山地方の都市商人研究の遅れにも由来するといえる。この意味でも、山形城下町商人をはじめ都市商人の研究は、村山近世史研究の重要課題といえる。

（18）本図はもとより、二〇〇四年九月に村田町古文書調査報告会「村田商人の歴史をひもとく―大沼家文書調査から―」（村田町教育委員会・奥羽史料調査会主催、於村田町中央公民館）において「大沼家の紅花

取引と商業活動―村田商人の全国取引―と題しておこなった報告のために作成し発表したものである。印刷・公刊するのは今回が初めてである。嘉永・慶応期の大沼正七家の諸帳簿や書簡その他に出てくる、長谷川家と連携した商業金融関係を網羅的に図示したものである。そのため、図示した諸関係が必ず全て毎年史料上確認できるということではなく、一部の年にしか確認できない関係も含んでいる（黒沢尻商人や尾張・三河方面との関係など）。

（19）奥州方面への長谷川家の帰り荷（全国物資・上方商品）は、実際には最上川沿いの諸河岸や羽州街道より、山形城下町長谷川家を經由することなく、直接に奥羽山脈越えの諸峠・諸街道を通して奥州方面へ搬入される場合も多い。本図では荷主間の商品・貨幣の取引関係に重きを置いて図示し、海運・陸運における中継問屋や宿継などの交通関係は一部を除き省略している。

（20）長谷川吉茂「長谷川家の歩み」第三編（原稿、一九九九年）。

（21）小嶋源兵衛家については、『古文書史料目録』第一九号（山形大学附属博物館、一九九七年）の「解説小嶋源兵衛家文書について」（岩田執筆）を参照されたい。

（22）なお、資料2の「山形町之義八奥羽第一之場所」とする表現をめぐっては、幕末期奥羽諸都市の比較検討のなかで慎重に検討していきたい。大藩の、いわゆる藩領国下の城下町仙台・久保田・盛岡や米沢などと比べて武家需要が少ない山形城下町の商業は、一八世紀後半からの地方民間需要の伸長を基盤に活況を呈してくるとの見通しをもっている。民間需要に対する商業規模や商圏の広域性という意味では奥羽有数の商都として山形城下町を位置づけられると考えるが、武家・民間の両需要に対する商業規模の総体でいかなる位置にあるか、については今後の課題としたい。武家方・町方からなる都市人口規模の比較検討に関しても同様の課題がある。山形城下町が、山形藩領石高と武家人口が減少するなかで武家需要に依存する都市から脱皮して活発な民間経済にさええられた都市としての性格をもち発展していったことは、岩田前掲注（2）論文でもふれた。

(23) 報告会当日のレジュメに載せた内容は以下の通りである。

「山形城下町の奥羽商業の諸条件（試論）」

①②③などの有機的関連

① 全国経済の中心Ⅱ「天下の台所」である上方と奥羽の交易は、北前船などによる日本海運が主流であり、江戸時代・明治前期には太平洋側よりも日本海側が「表」であったという条件

② 右と結びついた、酒田・湊からの最上川舟運により奥羽内陸部まで商品的大量輸送をしやすいう条件

③ 上方と直接取引の商業ネットワークを形成することができた特産物（紅花・青苔）の生産地帯としての条件

④ 近隣の郡と比較して村山郡には江戸時代前期より大藩がなく、いわば「非領国」地帯であり、藩の統制（専売制や藩札発行をはじめ流通経済規制）も弱いため、山形城下町商人は比較的に自由活発に経済活動ができたという条件

⑤ 村山郡以外の奥羽・関東に新興の紅花生産地帯が形成されたのに対応して、紅花取引のノウハウをもっていち早く進出し、山形城下町商人の商業ネットワークを広域的にはりめぐらせることができたという条件

⑥ 出羽三山信仰による修験や講の広域的なネットワークや山形が全国からの道者参詣の有力な中継拠点であったという条件

⑦ 山形城下町商業の形成期には、山形へ進出した近江商人の経営法や奥羽にまたがるネットワークが基盤となったという条件

(24) 岩田浩太郎「やまがた・明治の時代背景―三島通庸と山形―」（『山形大学附属博物館50周年記念 明治の記憶―三島県令道路改修記念画帖―山形大学附属博物館、二〇〇四年）に、県令三島時代における都市山形の様相や歴史的位置について素描した。

(附記) 本稿は、二〇〇七年一〇月二〇日に開催した公開学術報告会「交流史からみた山形―地域史への諸提言―」（山形大学人文学部主催）における拙報告「山形長谷川家の商業活動―『奥羽の商都』の

巨大紅花商人―」の原稿をもとに、注記などの加筆補訂をおこなったものである。本報告作成にあたっては、史料所蔵者の長谷川博明氏・長谷川吉茂氏・大沼正七氏・大沼悦子氏から多大なご協力・ご教示をいただいた。記して謝意を表したい。

本報告会は、人文学部プロジェクト研究「出羽山形の地域特性と交流圏に関する歴史文化研究―山形地域史の再構築―」（代表・岩田浩太郎）の成果をもとに三上喜孝氏・菊地仁氏・松尾剛次氏・岩田の四名がそれぞれ報告をおこない、各報告毎にコメントーターを配置する形式で実施した。会場となった小白川キャンパス教養教育二号館二二一番教室には約一八〇名の参加者を得て活発な議論がおこなわれた。拙報告のコメントーターは横山昭男氏が務めてくださり、戦後村山近世史研究の動向と山形城下町商人研究の課題について有益なコメントをいただいた。また、フロアーからは、山形商人の出自・系譜（近江商人との関係）、最上紅花の産地・銘柄、奥羽各地の共同荷主・集荷商人の性格、仙台城下町などとの比較検討、山形商人の蔵の保存・活用と町づくり、などについて質問・議論をいただいた。関係諸氏に御礼を申し上げたい。